



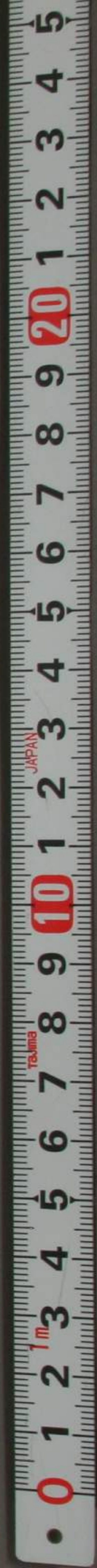
開卷驚奇俠客傳

第五集



三

13
3157
23



3157
23

関卷驚奇俠客傳第五集卷之三

浪華 蒜園主人編次



金長
金
去同町

第四十五回

怒と宥めて守護再策と議と
義と忘きて縉紳偽使と做る

話説島山持水の豫ての志願成就して今宵姑摩姫と迎へ拿んと想へ漫ふ
魂漂蕩て鬼狂きまてぬ。怡悦真頭も。只管家人們を急送し立て。佳禮の
準備と噴促を。原是富う家ある。且。忘れ足ぬ。東西へあつねと。家隸の
恭勝媒鳥們と幾々の懸共の。開餘の名も。死奴隸們も。長総の他も。
侍女ともあつね。由と父ふ報て。侍婢幾名も。京都より。美麗と擇て。下
と。豫て料ひ。うら。就盛が密意の。俄然。期日と縮め。うら。有。襲ふ
人。俾と。嗣て。就盛。高量。や。就盛。就。自家の。侍婢們を。多く。送。て。

関卷驚奇俠客傳第五集卷之三

関卷驚奇俠客傳第五集卷之三

そのひらんぎや、みてうまきことにて、つひそひまけ、けんら、あのらうらう、さし
 當日督儀の役も充、且又俺属も隸らまはる。畠山家の家人們も已が即黨ども差
 加へ、玄関向の緯と執せらるるべ、なほ、ふそ、
 さるれば、彼以侶も捫搦と、島之沸が一般あると、持永連も焦燥て、式之如く辛らま
 重昏迄も準備し、且赤阪の館に前も轎子稟拿ぎ、假全戸と設け、木造本
 泰勝も菅田鸞九郎と相副て、稟拿ぎ役者と、另も兩名の頭人、小駝兵九個と
 属へめて、武器嚴しく十字警固とさせ、館の前門まで大箒と燃連れ中門より
 一と轎子と納ぎ、地道ぬ毛檀と舗並書院の潤色、洲濱の結構、媳婦君の子房、侍
 女の局舎、寢殿の打点、ふ至るまで、光るが如く経営する。情景宜く想像べし、待女、鴈の
 専女の役して、長総是と職して、垂髪小粧ひつ。新小貳ひ、小衣手と着飾と、襦衣
 和より着、ゆる容体有繫、小鎌倉の寵臣らるる。藤白隼人正安同、妻の果めて
 有るま、進退ま朽惜らる。物執負も振まひる。其他の遊佐が館より、今日しも

来らる侍女們もれど、這里と晴と打分ま、人跡希る、片山郷も、花と紅葉と
 一時、咲匂ひ、心地せう。聞話不題、就盛、職分の重る色とて、篠持媒鳥と媒
 妣の名代らうて、正直が河備の館へ差し、自己の黄昏う、城と出て、赤阪の館に至
 りて、萬事を指揮し、甲夜返る比、及まで等とも、音もせ給が、持永、水更らう、就盛
 も等説て、且不審も想ひ、ま、人と差して、覗するふ、河備の館も混雜と、詳き
 光景も知さされ、篠持媒鳥と喚出て、怎あくと催促するふ、辛らま、夜半
 過る程も、松明の光多く、所着て、陸續とて来らるる、遠者も出しく、奴隸們が、
 次第も報るふと、持永、就盛、禮服も改め、等が間らる、新夫人の轎子、小假舎も着
 ぬ、河備の家長湯、浅敷義、今一名の侍と作法の如く、轎子と、遠寺、泰勝、鸞九郎、立出、局
 小上臈の轎子まで、悉く稟拿て、さて、新夫人の酒、盃と賜る、式も果々る、就義、の、回
 べきと、枕、泰勝們の、事あると、館内まで、隸の行ね、媒鳥の、前、遙、下馬とて、案内小

立六島山家の轎夫們的轎子と拾つて徐々小進と入る浦風小上賜之局女と共
 小引添て歩む長総們出迎へ豫て構へ子房の内へ案内せむ小新夫人の轎子
 と下て扶掖し那裡小入て總ひう。長総其餘の女房ども開次下の間待て萬の
 侍と執賄へ浦風の局女お嬢と俱小新夫人の傍小在て準備せむも蕭々として顔の些
 少も露きと進退のあつた武家小生三浦撮裙捌け現も姑摩姫をうぐと想ひ
 小多長総們の偷着せんも有繋せ低語らふせて居らる。持永の心めし
 て先疾透着せんと念へ縁側傳ひ小竊ひ来て窓の障子と唾を濡し密小指
 めを穴隙と穿ち窺ひ看まとも浦風が快くも心と利せ。屏風と和ら押詰て障
 子小引廻らしうらまの着まとも着る徒小靴を隔て痒と搔く心地の〜と為
 術らうれ就ても着んと俺ら。噫けら益らうれと眩きあが技足と退き
 出じてる小同意念の木造恭勝假舎の役は竟ると即て走回して物蔭ら。那

千里鏡の裡小所着る美人やあつと覗ひ小被衣小面へ省も見えど他とハ
 無比女人と看ておぼろろきり云べくもあら。同く這裡小竊ひ来て。犹克偷
 着せんと撞見頭小持永と不像首と昭着せ。涙と駭き眼より火の出るまで
 小覚ゆとと聲とも揚得ど偷音小本小飲と透し看ま。這へ今即君う怎地小出
 まる一向小御免と被るべと平張俯ても真箇中陳謝る声之憎々まで持永ハ俺
 と忘らうまで小心花開け折柄るま。怎てか咎むべき痛苦と笑小混らして己が
 子舎へ退まらる。小程小就盛ハ持永と伴ひて威儀と正と立出。媒鳥風
 爐ハ即と喚出して新夫人小恁々と听えさす。昔子の長総們小侶と浦風と引
 て主位小着持永ハ客位小坐と互の口誼言寡小室町様の三々九度浦風が酌小立て
 儀の如く小竟々其次の席と更て持永就盛小旁と謝し酒肴と換て管待ハ就盛
 も祝言と陳て媒鳥恭勝風爐ハ即と召出て各々慰めつ聲も稍高くなる

まで酒を吃せて恰好遊佐の城へ去りて去りて風爐へ即敷義も河備の館へ回らう。正直
 今宵の首尾を脱ぎ注進しうらう。却説持永の衣服を換侍女們小扶掖して
 新婦の閨房へ入て看る小赫たる一燭も。悉く消果て壁小背多る孤燈の下小
 小上臈の浦風が畏れ侍りて持永顧みて這不意き因縁と。你們も親く
 らぬと會尺しうらう手と拍鳴して噫反暗き所へ快疾燭火を拿来と。大喜小
 罵ると浦風の推禁め姫への所勞坐せり。今宵の御佳禮然と稟難く押て
 出立る人々頼み即君の御意めて聊かん儀式を畧せり。唯疾寝て多るひや
 最大人びる所見多るとも女子の孰も裏慚しき。のしは開のし御所勞も
 出小こそと笑と含とひひり。持永も打笑ひ和女郎が然し。道理は俺も少
 所勞氣多。さる床上の献酬へ和女郎と這て果き飲と酔う。俣小咱と遺忘
 て不覚小戯と。長総小酌と把と。又四五盃と傾けう。若子の教悔られう

世俗の習礼
 床盃といふ
 例の俗儀
 伊勢主の
 雅記小の
 今應永中の
 只滑筆の
 看官幸告

如く。衾衣の中へ躡りて息も微で居らうと。持永の差覗き忘てや然らう
 物愧し。道首へ出て唯一つ吃りやと舌疾ふ。と回合もせ在る。肛裏小
 思ふや。現姑摩姫の智勇小秀。婦女との男女の情の未得知未通女子え
 へ羞愧う小こその思へ強ても哄誘は恰似中と長総們と次席へ出立
 て去と。長総の酔う俣小。即ち年来の。おん所勞も遺漏る。今宵の晴巻
 らひも。羨やと高らふ。戯弄て出ると持永の所態と打笑。袴と脱と浦風
 押畳ひ開間小和ら屏風と曳用へ入らう。躊躇て傍の行燈と挑んと。浦
 風快く意得て開い又宴小任せり。曳の模様を揺消は。噫と兼鳴す。持永
 と箭庭小手と把推遣て。竊や小打笑ひ間の紙門と押開て。疾く外面へ出らう。
 持永の搔搜寄て。同い衾小入て看る。汗も浴小卧居らうと。只姑摩姫と思ひ。若
 醉小任せ愧と忘と。年来日來の繫想の限と。長と説連て。恰も瘡物小



五



昆玉一夜
變化瓦礫
おきよやまきりの松の果
さびらるるてくろくちのわ

障も一般漸々小慰めければ甘子も時小暨びる婦女も怨すが小愛憐と所知節
 も有小豫て姑摩姫と蕩まんそ。那豪衰を授けり。隨喜破負香と薰せしむ。然火連小
 發動して堪ぬらう小覺まで只覺らるる。物も言ど徐々小身と委すむ。持永頻
 小意と操て西ささう雨ささう。終小夫婦と成さる。持永の真間より心勞さ小立添
 て酒の醉酷く上ささる。前後も知ど寢ささう。不圖夢寢て四下と看む。窓小朝陽
 の差登まで辰の半剋も過せと者ゆる小急忙しく身と起し。但見。新婦の前夜の
 俛小傍小卧て在る。卒と差覗きて覗へ。這をも如何姑摩姫と只麼念ひて。
 偕老の合巻と結び。新媳婦へ額大く口方中と頰え高き谷のたふ。咲山下風
 小吹散と龍田の山は紅葉と。者ゆるらりの痘瘡の癩間さる。あふ小白粉と施し
 う。光景ハ譬喩つづもる。形容さる。呆了と半晌さる。物も言ど居さる
 ぐ。忽地涙吐いさる。怒氣憤然と湧上さる。苛疾き聲と掉絞と。這奴抑甚麼

的る。咱這便室の偷入る。快々起ると罵て背と礎と打う。髪
 きあがり起直る。猶克と去給の冬。河備の館と酌小立さる。黑暗天女
 戸隱山の鬼女と念ひ。正直の女兒甘子である。持永再遍肝と消し。和ま
 怎の縁故と以て俺寢所と在やらんと。いども甘子の口ささらひて。回答とささ
 り。い。屢噴て止さる。物音と听て浦風の紙門とささる。推開て。徐々と持永が身
 邊小衝居て手と束ね。郎君も眼と寤ささる。姫も起ささる。ふらと
 空知れ。貌小いふと見て。持長急小眷顧つ。ヤヨ女此是姑摩姫とぞ。怎かして
 かる。醜女と吾閨房と。率と来さる。這ハ正直が料理。但し誰か付さる
 ぞ快姑摩姫と出さる。と敦圍猛く罵と。浦風ハ騒ぐ。氣色もさる。姑摩姫
 殿小非と。念ひて知せさる。といさる。果と持永の巻と握て。眼と睜り。這
 女奴が大胆さる。嚮小正直が山亭より。千里鏡以て。慥小看者。姑摩姫ハ沉

魚落雁閉月羞花の美人なる小か醜悪き女を送りて誰か開と實とせん。
 此是正真が宿所とて一遍會う他が息女の苦姫とて忘あして闇夜も
 者混んやといふ浦風此とも怯まば姑摩姫との非るよりと既小知せぬ
 るらば更小奴家小誰人かと問せぬやうもやうと半分論せば持永ハ可黙女
 奴辱くも院宣御説の故とて持永が妻小賜へる楠姑摩姫と暗々小換て恚
 る無慙の白痴と来せうとて這俵小滓溜ると想ふや抑誰が較計て這企
 るハ做るぞ。真直小白状せよ。稟び目小鬼者せんと擬勢稠て責詰る浦風
 ハ尚も臆せば。開ハのこまのりりりりり。河備さぬの御息女を要らせぬん與小
 とて河備さぬのちん宿所へ納米と贈るのみ。上。河備さぬの御息女と嫁もあ
 ハ當然の理とてと更醜悪とて罪るゑる大畏憚るが仰ともあやえはらと
 と听て持永怒不堪と任他餘の滓ハ左ま右まと院宣御説と蔑如せり。罪

料を乳とて正直一家滅亡せん疑ひのこその胸想識べき婦人と敵手小論
 弁する。却也無益の至。快々出て去べと余と聲立て踊り出。媒鳥やあつと換
 立との篠持媒鳥ハ甚麼滓やんと出て来つと持永ハ看と等と聲と勵
 ま。想ふ小違ひハ大變あり。快々馬を牽りて来と遊佐の城へ赴きて今急端更
 と譚せん和即ハ夥兵小戎具とて。俺着長も拿持せ疾々那里へ續くべし委曲
 の情由ハ那里にて説も听せん急げくと連小厲く下知すれ。媒鳥ハ甚麼とも
 辨へど推回とて向べき擬勢るる。いん。隨小馬小鞍措き快椽前小牽立
 う。持永ハ刀とち把跟より續けといふ。一鞭られて暮々地小遊佐の城と馳
 驅出。媒鳥ハ猛可小着急慌忙忙り。夥兵十名小腹巻ませて持永が鎧櫃を奴
 隸们小扛擔を。その身も鎧把て投懸喘ぎくぞ追うる。就盛ハ急とも知ど目高
 く起て徐小朝餉と果せり頃接待の若党が赤段さぬの火急なる。御用ありとて来き

と。と報る小就盛不審から。客殿小請と忙しく袴を着て出會う。座も未着
 以程小持永の聲繋ていつ小貴老の持永と。什麼の與小詐とて。恥辱と与へらるるを
 氣色と変て罵る小就盛ハ思ひも係ハ驚きて。在下不肖の身おととも。即恩と被る
 管領家の即今息小對し。どう。どう。鹿畧と存せき。開ハ亦何等の律あるふ。包藏
 仰らる。といふ小持永息接取と流る汗と推拭ひて。楠姑摩姫と娶んとて。貴老
 嫌妬せられふ。怎やと正直が女兒の醜婦と送來とて。恥辱と与へらる。やん。持
 永愚昧と雖ども。怎ぞ昆玉と燕石とを弁へらん。按小貴老も正直と膝合て
 啜ちく。回答小因て存る旨あり。如何ぞやと膝と前めて。確と睨く。無念の顔色
 打も果さん光景小就盛も大駭き開ハ又意外の椿事。你も知せぬ如く。在下も此
 属る。意と盡して。即替嫺の全成就とせき。やん。本走せ。を怎やと。さる騙計
 と構ん。省惟ひても見あ。父祖代々即被官とて。什麼傳も即蔭小依ね。や

る。在下が忠中。然様の不忠を致すべき。按小姑摩姫が机変ふて正直
 と欺詐とて。恠る詭計と構。やん。欣且即心を鎮めらひて。萍の始末と
 詳小所礼して。後小又愚案を述べらる。い。い。い。持永幸らとて。面と此。少和
 らげて。有る序次を話説。かく欺る。上。上。上。快々河備へ押寄。正直が白
 髪首と。拿でや。措るべき。貴老倘他と同意。やん。加勢して。後と詰ら。よ。
 既小媒鳥小戎具を。門邊小等。措られ。直小那里へ。赴くべ。と立んと
 ず。と。就盛ハ。着忙しく。推禁め。あ。ん。腹立ハ。理。ま。ら。正直ハ。小身。と。とも。即直
 泰の的を。伺。い。ど。て。私小誅。あ。ん。ん。身上小疎忽の祟ハ。遁。ま。ら。ん。と。され。ハ
 且正直と喚寄。て。仔細と。向。ひ。開。く。思。考。小。任。す。り。と。も。遅。き。小。非。ど。倘。さ。る。响
 みの就盛も。恠。で。外。小。着。ん。必。あ。ん。先。隊。仕。る。べ。萍。を。引。も。向。む。と。結。果。ハ
 ハ。宜。し。く。ぞ。只。管。在。下。小。任。せ。り。と。頻。小。諫。め。止。ま。し。め。持。永。漸。々。怒。氣。を。押。へ

然らば目今正直を這首へ喚て弘明も久在下の家小回るとも。面白くは這里
 小在て始終の事を窺はん。倘正直が詭計あるべ。即時小免く稟さう。といふ小就
 盛稍安堵して。就て譽九郎を喚出と。河備へ差て正直を喚り。持永の別室小て
 朝餉を出と。管待多。却説楠正直の苦子を出し遣。う後も心のこころ限ハ
 るく。と今更籌策の出ると知後。只得木石と相對ひて。回らぬ悔の噂の。為
 つ居る小。曉天候。敦義が回来て。那里の首尾の好す事と云々と報し。小
 此の心安堵さうと。尚亦露頭し。とんどう。持永が怎ふいんと。念へばの安
 うら。枕小着ても。熟睡するも。既小今夜の明果され。快起出て朝餉を果し。
 又木石と同様と。論出ての。も得在る。近侍の的。小分付て。赤阪の方へ出差。那
 首の動静と。視ふ。要時して立回り。赤阪さぬ。只一騎馬を飛せて。方僅遊
 佐の城へ出る。ぬと。報す。正直され。と。猛可小澤の出来。如く。心を冷して居

ころ。處へ就盛。使者。菅田譽九郎と名生。て對面せん。といひ入。驚破と想入
 心を静めて。出てこれ。會する。小譽九郎へ。就盛。口状と述。且夜前の婚姻を祝
 し。ぎて火急。小御商量の旨。め。目今在下。方来らる。といふ。正直の驚駭
 げと去で止。ぎ勢。う。が。就開へ。泰。と。譽九郎。同。差。件當。と。催。して。さて
 木石。小。焦。々。と。暗。々。小。告。て。怎。と。申。ても。就盛。が。火急。小。喚。の。好意。小。あ。ら。じ。時宜。小。依。て
 大。変。小。暨。が。ん。緯。も。計。ざ。し。う。と。今。將。如何。せん。と。い。ふ。能。意。得。る。と。い。ふ。棄。て。出
 去。ハ。木石。も。今。更。小。危。殆。物。と。念。へ。ども。差。て。緯。の。落。着。と。べき。勢。ら。う。と。い。ふ。杜。れ。も
 得。せ。念。難。く。額。小。手。と。當。正直。が。後。影。と。要。時。目。送。て。居。ら。う。と。正直。の。馬。と。疾
 め。遊。佐。の。城。へ。去。て。看。ま。い。玄。關。の。旁。邊。小。後。持。媒。鳥。が。懸。兵。ども。小。手脚。當。小。腹
 巻。して。各。々。戎。器。と。携。へ。つ。今。緯。有。ん。とい。ふ。容。体。さ。し。十分。小。鬼。胎。と。抱。き。原。來
 持。永。就。盛。們。前。夜。の。事。と。憤。り。て。裁。き。ん。と。こ。量。り。と。い。ふ。昔。子。の。既。小。死。う。致。さ。し。知

らんか怎ふもして明ふ陳謝はるる悔しき事と為てうと歎けど今ハ為術をまゝ跟隨
 小立る敦義小津の意と心得させ案内させられ接待の着党出迎へて疾く客食
 通さう。置直適末も討て出づ的やあると眼と配とど殊更小奇異き様体も見え
 さまへ右見左見つ惟難て尋思小心を悩と折らう。就盛出て對面。正直と迫く
 招き。今且持永がひつる由と箇様々々と説出て貴方の什麼と念ひして佯様の
 事を謀らまじぞ。説でも著き辨らう。今番の誓姻ハ私一家の事らうと院宣誑
 意の故と以て不肖されども在下が媒妁と勤めつる。脱落ありての上へ對して
 稟解べき由もあし。さまへ左馬殿の貴方と打も果さんとて立腹ありしと辛らして
 在下が推止。一回貴方仔細と向て。開久と怎生とも。進退せんと宥め措らう。
 按ふ身の姑摩姫の姦計らう抑又貴方の詐偽知れども。回答依て自他一家
 の滅亡とも辨あべし。と面色変つて見えさまへ正直ハ是と所て面色土の如く膝

是戰慄して。預て右のまん右のまん。と惟ひし津すう一句も出後。唯一向小頭と下
 左馬介殿の立腹も貴老のまん疑難も一箇として理らうとといふのあり。そま
 想つぬあめらども。如何せん俺姪女の前夜猛可ふ約と違へて箇様々ふひ
 一づ争ひらうとも為方らう。在下も自殺と分解せんとし。と。姪女が又推禁や
 て恚做しと誨へるを荆妻が諾ひ料して。女兒を以て赤阪の館へ嫁遣らうと
 首らう尾す。此も藏まの姑摩姫の説と。由も。庚帖と把換らまじ。津由も
 倉推出て。明々地小演尽して。只管小台忘狀する外らう。就盛ハ熟所と駭
 呆して舌を振ひ。肛裏小思惟らう。意外小出らう。姑摩姫が。神出鬼没の謀
 畧ハ。豪表まどう及ぶべし。あらば。那庚帖と豪表ハ。只麼姑摩姫が本命と恩
 ひて是と調伏し。且その合番と祈らう。法驗さきふあらし。案小違ひ。若
 姫も。伏で持永が。妻の定めらう。まふても。姑摩姫の。怎らう。故院宣

御説と矯る滓と知るる人是と按へ現他へ神変不測の幻術ありき。然るに正直が罪を弘くして京都へ訴出んも、院宣御説と偽りたる罪の這方へ係るべく且の嚮小満家小諾ひ置る滓もあまの露頭さるる。俺身上小繫るし。奈何のせん種々小案廻らし辛うじて一計と念得うらむ。面と和らげて正直小いさう。案小相違の令姪女の机斐令愛を以て換る手段一驚小餘あり。さうさう。あらう。俺疾く俺報もせど却也小開謀と助けて共小在下までふ。かろ危難と係られう。這倉貴方の罪とのへ。佳且ども滓這首小及びて縦計貴方と就盛と刺交へて死すとも。管領父子も欺きて恥辱と奪きて事漏る。世の人口小贈多るる。木々家の瑕瑾とるる。され目今京都へ稟して貴方の罪を弘くすべきさうと。恚もして令姪女を四引出して一日さうとも。赤阪の館へ迎入る。違勅違説の罪ともさうは。尚這うへ左馬殿小商量して料理んと。いふ

正直手を捺て。昨夜姪女が違約せし時、刺殺して晩生も腹を截んと思ひ。いども。原來管領并小貴老の。おん面皮も係らんと思ひ。且貴老の亦阪へ既小到きて等とこれの勢恚生とも術うて終小借料ひ。いひて姪女小荷擔して設意を蔑如する。滓ありき。尚這うへも然るべき。御商議のひ。恚さるる。辞さへう。と。口管勧解して止さう。まの就盛も打領き。然らば左馬殿小商議らん。暫く這里あて等と。いひて奥小入て持水小會ひ。件の由と告示して。きて諫てのひさう。正直が蠢愚の罪。免すべき。あひも。いひて他。豫ても知る。あ。痴呆さるる。人。いひ。熟く姑摩姫小詐偽して寔小途方小莫小え。咱女兒とめて換る。つ。あ。鳥。乎の白痴でいへ。敵手小せん。無益さる。勿論這回。院宣御説。老侯と晩生と。暗小議して為。いひ。いひ。訴へ出る。却也小這方の脱落とあるべきさう。然有とて今急速小結果。いひ。いひ。他。柳管小御先代。う。旺迹の的。いひ。いひ。

御膳の作者
北島俊雅と
誤て俊雅と
す且此人ハ
俊雅の誤
るるに詳
卷尾論
ふ如然れ
ども看官既
小俊雅の名
記願まらるべ

殺し罪の遁とど。さきへ枉て免し。尚那女兒甘子と。要時御館小留め
措て睦しき様小管待より。さきへ又姑摩姫も心と放して。這方の機密を窺ふ
ゆらるべ。約莫他の幻術ありて。毎もく這方の機密と。前知らるる先と
超して。謀畧の敗るるも。他が不意の响小起して。謀畧を施さば。復又
他が欺瞞るべ。且他が院宣誠意と。猜ふ故に。其勅書御下文のさき故るれ
ハ今般ハ北島俊雅と。太上皇の印使と号して。院宣と把持せ。誠意ハ晚生事
と執て。俊雅と諸俱ふ。立並んで。當城へ他を口出で傳へ。佯箇する响ハ公法るれ
ハ假令假托と知らるるも。誰小向ひて。訴へ出さ然らば。屈て承允すべ。尙ま強て
拒まらば。道路小奇兵を伏措て。搦拿と御館へ送らん。开も手強くて。搦難くバ。
結果と錦の御旗以下の東西と。再遍把出し。五十日。榎電次が古轍の如く。兵
と集る廻文と。贖せて。老侯より披露も。あん答り有べと。されども。恚まて小

これ今山
隨て更中改
むるに畢竟
小説の擬名
るんハ

倅煩累ら。あつべら。十ハ八九ハ成就と。甚るる物と。念ひのひそ。
さきへ且正直ハ許して。さきへ氣を對面し。後小到と。他と謀畧と。行
はとべ。必急端あり。ま。と回々のひそ。持永法々小會得ひつ。さきへあつら
ゆらるべ。今番ハ屈て。免ん秋後日の倅も。覚束らるる。俊雅も。嘆下し。豪
表阿蘭梨も。請い。末て。時小臨して。拿稠る。豪奪る。難くも有す。さきへ
正直小對面せん。と。之ハ就盛領きて。枕も机密と。耳語示し。舊の客殿小立出で。
正直小持永と。更會すれば。正直ハ一味地小。頭と叩きて。勸解る。而已。另小ゆ。由らるる。
持永も。又面と。知らげ。倅の情由と。承りて。執念く。貴翁と。怨むべ。あつら。併那
姑摩姫と。這儘ゆ。と。止べ。も。あつら。且ハ上のおん。旨る。ハ。介後齊。小商議と。俺
們が方へ。送らん。や。さきへ甘子ハ。晚生ハ。嫡妻と。て。久後。秦晋の好音と。結び。貴
翁と。泰山と。仰ぐべ。と。いふ。正直。怡悦と。向後の難義ハ。知らる。れ。先通表と。て

浪風立まば不むべきやうもさく。説く任小言稟すまは就盛も取善ひて尚云々小
 籌策と正直示しし。是亦推辞む事を得ど。阿面々々と諾ひて。暇と
 告て宿所小回と妻木石を喚出て。箇様々々と告示せば木石覚束るるまど先當
 難の道とてれば。丈夫の恙るを祝し。稍安心を為さう。持永も為方ゆく。赤阪小回
 末て後の籌策の與と念へ。強て然や氣さく紛か。其夜又も勉強して。せり子取房
 小到り。せり子も浦風も持永が今朝の氣色小肝を冷。向末怎ふるもやんと。密
 やう小譚合て心と痛めて在る。小案外小持永が心解。来ぬるまは怎ふる為る歎と。旁
 小の恐懼しとも思へども。先開心をさう。小管待て大く歡喜。暗々小河備へ消息
 して正直夫婦小辞由を細々と報遣ね。恚さう。就盛の言田譽九郎小机密と言
 會ぬ消息を齎して有。次第と脱もさく。満家小注進。又自己が計策を。未女く
 報差さう。まは満家所て大く駭き。或は怒とど為術もさく。急ぎ豪表俊雅と

喚集へて件の次第を聳き告。まは俊雅の听く事毎小驚歎。さて逞き女をみて。て
 不慮吐息と吻をまは有繫の豪表も呆と果。約莫愚僧が調伏の法。凡僧の
 為る所と同。龍樹井より傳。真言秘密の奥妙小役優婆塞の
 神呪と加へて。傳來さる修法。祈と必然應驗ある。一遍も愆らひとね
 と。甚麼やとく。姑摩姫の那庚帖と掠換。この正直が疎漏。されば
 只官合色の儀の。整ひていへども。庚帖の本命錯ひ。これ竟小甘子と令即君
 小祈と隷系らせ。案外されど併法。験るれもひの。致這上の貧道も
 那里へ立越え外。遊佐氏と幫助けて他が幻術と折くべ。されども既小貧道へ
 嚮日那宿所去て會。さるもいへ。面と對せん。妙さる。この遊佐氏の計議
 は如く。今番へ北畠殿印劬。御下向りて。今と。俊雅一議
 小及び。開の安き程の。出仕小間暇あり。されば。と。満家引取。

その究竟の痺こそめど。這屬將軍家住吉へ仰代泰と立らまんとのおん
 事ことも。御使の人を選えらぶべしと仰出されうるも。幸貴所へ縉紳家のおん
 るされば指泰らせん。倘仰附らまらば。塚浪華遊覧の痺と。序次小願り
 べし。十日十五日のおん暇の故障あへきるるな。其間小河内へ立起え
 恁々料をるべし。さるふても姑摩姫の少女うと。も侮どぐと。必尋思
 るひく。他小雌伏し。まゐる。このふ俊雅領掌し。その心得て。恁らば件の上意
 と所へ急進小出立とべし。と。又豪表も。開頃小貧道も。必那里へ泰會
 姑摩姫が術と破るべし。といふ。満家歡喜。猶その計策の概畧と。數刻密
 談ふ及び。後各辞と。回さる。満家のその翌日。鶯九郎と喚出して。就盛への
 回怙と。遞す。猶恁々と事の意と。得させ。回し。差し。ね。
 一鍼と飛して賢婢強人を捉ふ

第四十六回

奇遇を感じて忠士既往と語る

却説八九の莊院しやうゑんの正直ちやうじきの回まわり。後隅屋安次あんじ奴隸ぬれい手作てまと。口出くちでて。暗くらき小
 事情じやうじやうと。得えさせ。赤阪あかさかの方かたへ。差さして。那首なびしの動靜どうじやうと。覗のぞへ。し。小那館おなぐんへ。出入しゆしゆして。蔬
 菜さいの痺しびと。賄まわふ。莊客しやうかくの某甲かいつがへ。手作てまが。知音しよひんなり。いふ。僥倖りやうじやう小欺倚せうしよと。甚し麼やと。さ
 捜たづね。し。り。ども。持水ぢすいへ。就盛しゆじやうが。謀畧ぼりやく小隨しゆいひ。媒鳥ばいじやう長なが総そう們らと。酷こく。禁いめ。齟齬そごひ
 う。痺しび由よしと。深ふかく。包藏ほうざうと。あり。ま。ま。臺所たいしよの。奴隸ぬれい們ら。更さらに。知しる。者ものなり。り。り。それ
 ば。手作てまへ。空からへ。回まわり。て。安次あんじ小報せうし。る。安次あんじ姑摩姫こまひめ小就しゆと。報はう。姑摩姫こまひめの
 られ。を。図ずて。原未げんみ持水ぢすい就盛しゆじやう們ら。恥辱ちじよくと。忍しのび。て。音ねも。あ。へ。必かなず。深ふかく。騙計ぼんけいする。の。
 あ。ま。る。べ。し。と。疾はやく。も。悟さとり。て。安次あんじ垣衣かきも。其その旨しと。瑣言さごんき。示しして。此これ。少すこし。由よし断
 せ。り。り。り。り。一ひと夜よ人定にんぢやうと。て。后垣衣ごかきの。独立どくりつして。廁舍てしや小去こきて。回まわり。て。さ。る。手て水みづ鉢はち小立た倚しよ
 て。檜杓ひしやくを取とり。手てと。洗せんふ。時とき思し係けいる。れ。袖そで牆かべの。陰かげ小。一ひと個この。癡ち者ものあり。て。覆ふく面めん頭かぶ巾きん小



欲奪姐衣而
荷二郎受網

女客傳第五回 三

三

面を隠し。身体を鎌甲と着下し。黒く装ひ。奸細の打込物とも言ど衝と寄
 て垣衣を袂と把爪を引攫へて去んとするを垣衣眼敏く看処りて咄嗟とづり
 身と翻し。把と袂と掉拂へ。透もあらず。再立蒐りて。手拿小せんと争ふ
 餘勢。小椽小措る手燭と蹴飛し。黒白も分ぬ星影。垣衣の彼此と身と及し
 衣襟小縫る。鍼一線と抜把て。丁ど打る手凍の掌中。仙傳微妙の女使小
 受る。狙ハ聞ふも錯と。頭巾の透間と左眼小。さううに打稠と。急所
 の痛手小。一聲叫びて。鬢居小。慥と平張らう。ささども死ふに至らば。足踏直
 て衝立上り。腰の刀と見ると。抜て音を菜小斬んと。滅多打小。薙で廻る。垣
 衣の差違りて。再遍打べき。鍼もあらず。頭小。挿る耳。櫛の并と疾く。抜把て亦
 打出と。掌中の違ふも。ゆるぎなく。刀持る右の腕小。裏徹まで。打稠る。這
 小怯。癖者ハ刀と。曼哩と。採落して。抗らず。唯ひ。逃さんと。せり。折

しも戦ふ。風は音聲も。心と放さぬ。安次の物音を。听て岸破と。撥起き。枕邊小
 立る。脇差の刀と把て。まじ出。外戸一枚。蹴開きて。樹間と。潜りて。出會う。小逃んと
 背向く。癖者。が身後の方小。走蒐らう。項髪。廻で。拽寄つ。足を揚て。踢らう。へ
 仰さぬ。小拽倒さう。と。押へて。此も。拵せぬ。姑摩姫も。又音を。听て。守衛刀と
 腰小。帯び。手燭と。携へ。出て。来て。復一賊。扱へらう。といふ。間小。垣衣ハ。快くも
 長押小。繫らう。早索。手操て。安次小。遞らう。と。拿と。拵々と。疾溥めて。拽居
 らう。姑摩姫ハ。噪き。う。氣色も。あ。犹。彼此と。眷願て。今宵の。賊ハ。一名と。看
 むれど。復一ハ。尚小心と。支黨らう。バ。开奴と。バ。這方の。小庭小。拽りて。未ぬ。奴隷
 們と。起して。喧囂。して。詮る。糸も。只。穩便小。料理べし。といふ。安次。畏りて。
 左邊右邊。小心と。配と。他小。怪し。きの。所見。ハ。賊。が。棄らう。刃と。拾上。輕
 小。収めて。俺腰小。帯び。索端と。把て。拽立。つ。外小。遠らう。姑摩姫の。便室の中

庭小棟居う。姑摩姫ハ垣衣と酷く賞。鉞擲技と教へ小倦ど習ひし
 你の手練。日數も経ぬ上達し。今宵快くも初技小猛る賊と拿へし思
 ら小倍てしと憑し。とハ垣衣畏て想係るき今宵の厄難。賊ハ手術の
 ある的らんと。豫て誨へせあひする。鉞擲技のたうりせば。争う脱れはるし却
 蔭小依て助アハ怪我の功名小きうらふ。復一即が時よく撞見て捉へし幸小
 ひとのハ姑摩姫もち點頭き技小誇らぬ你の謙讓然而こそよく首上
 くと響小五十日槌隆光們が夜稠せしその响ハ與聲小殺氣のじ故小快くも
 前知しうらるる。今夜の賊ハさう祥や。案小五吾儕がうまてふハ拘らぬ的
 らる欵先疾仔細と問べしと。那押居る便室の障子と。閑せて尚克着る小
 件の賊ハ左眼小鉞と擲して昏々と半死半生の体るまハ安次ハ鉞と接取り
 又腕先小立しうらる。銀の弁と抜て。這奴ハ脆くも弱くまハ打棄措ハ死めや

せんきてハ支黨の穿鑿も仕ぐう。緯の仔細も知くこれハ響小貺てうる神草
 と以て今一番活しひつ。如何あらんと伺へハ姑摩姫听てち點頭き你的料簡
 最佳し。然れどもさう悪漢小神仙の靈薬と費さハ勿体あり。只开莖を水小浸
 して其水と塗て得まよ。まよも奇妙の験あつて。开奴が眼ハ潰れぬるべし。垣衣
 开首も持有う。といふ垣衣意得て守護符袋小収めう。活人草と採出し。茶
 碗小清き水と汲て。那神草と二遍三遍押浸ぎ安次ハ賊ハ頭巾と捨投棄て。熟と看
 てある小年紀ハ四十小迫るべし。色黒く頬骨荒て處々小舊瘡の癩あり。一癖の
 べき面補るる。不思議や額小金印あり。二字の形と露せり。痛瘡小弱て頭と
 低る。願と引奉て燈の下小差照しハ垣衣ハ甲斐々しく。流るる血汐と紙以て
 拭ひ件の水と瘡口小塗んし。つ賊が顔と。熟視する。半胸ぐう。徐々やして
 那靈水と。臂と眼小塗まらう。神草の奇特掲焉。立刻小痛苦と忘れ

一あや那賊ハ已小復アと。頭と拾げて人々と左見右見と。安次の聲と厲はし
 礮と祝視て這草賊奴が大胆さ。去秋五日榎隆光が多勢と率めて夜稠世
 中も。姫上のあん武勇で一個も漏さず誅せられ。开由知さるひあじと怎う未
 して虎の鬚と。曳んとらるるぞ。但し人小頼まれ。飲真直小稟と。し白状
 せよと。責問して件の賊ハ阿面う色さ。恠ううへ其甚麼と。匿人這莊院を
 前番小倉宮よう賜り。一千金の有ら。听べ其と。賊人と竊入てひ処小る美
 婦人の只獨。廁舎小去と。着着し。立地小法と。換て。搔攫ひ。娼妓小賣人と
 思ひ。外へひつ。僕這地小参り。幾小四五日以前る。争う人小囁と。願
 くらん慈悲と。命と助けあへ。と。勸解と。安次肯ら。慥感さ。賠話ふて
 免と。思ふ。愚昧さ。看と。戎具小身と。固めて。あん便室近く入ら。さ人の
 る小。垣衣女と捕んと。さるも。財宝小の。眼と掛。草賊と守。さる好々

いつ 何時までも白状のまが。死ころと。恠ても寔を吐さ。腰の鉄扇枝把て。立見ん
 と。とさると。姑摩姫ハ。要時と推禁め。佗の料簡さ。ゆさ。夜中の叫聲高し
 て。聊不妙の處あり。奴家直小問と。那賊小打向。詞と和らげてひ。れ
 盗賊慥小所け。和即ハ必囁と。人あん小疑ひ。絆の始末と包むと。真直小稟
 せ。さ。命と助けも。尚又偽と陳。今立刺小斬て棄ん。快々稟せ。この
 間小垣衣も詞と係て。和即ハ奴家と見識ぬら。奴家ハ和即と見識。今より十
 三年前の秋。九月の某日。陸奥國白川の。関と渡瀬との間。榊鎖とゆ。さ
 支村の。産土神祭の試集の日。七才小るし。女子と。拐うて。越後國へ賣んと。さ
 り。あ。この。件。の。盗賊。の。呆。さ。ま。ま。小。大。小。駭。現。の。さ。ま。人。ハ。さ。る。津。あり。き。开
 と。怎。小。と。知。る。へ。と。問。ハ。垣。衣。さ。ま。か。と。當。下。越。後。の。不。毛。山。ハ。麓。小。到。と。和。即。と
 欺。き。樹。杪。小。攀。登。さ。る。ハ。奴。家。ハ。登。時。旅。の。士。人。の。伴。當。夥。多。跟。隨。さ。る。小。奴。家

が難義と報し。和郎云云小陳ぢうらども。尚許さばて追捕稠拿へんとせられ
 ぶ。和郎逃んとし。葛藤小足脚と膝とて千尋の谷小墮うららとせ。迹
 来ハ又怎ゆと命助と這頭りうらふ。未ア今犹悪行の改らざして這らん館へ
 竊入ハ甚麽事ぞ。詳小稟上よ。奴家ハ和郎が故小依て。生做るハ父母ハ會日た
 りもさく。尚種々の災厄と脱して這里小御座と。姫入小奉仕せさせ。殊う御
 恩と被アと。身ハ今安き小月ととも。心の愁ハ一日片時も。絶るるるき根源と
 ば。食是和郎が為し業あり。當下看識し和郎が顔面ハ。年紀や老て癩さあれど。
 見分ふべし。あらまじ。といふ小件の盜賊ハ。酷く慚愧する色見えて。頭を低て黙然
 と回答も得せ居うらら。埒の奇遇小姑摩姫ハ。いふも更ニ安次さへ。うち駭きて
 垣衣小向ハ。原来你ハ這草賊小。初き時扱うされて。陸奥より伊勢路まで。未だ人
 歎とハ今宵まで。在下も知らぬ。況て姫入ハ。知食んや。もは。苦うらまじ。埒由と

来女曲小告ておん疑慮を。先晴させをうらら。といふ。姑摩姫も訝とて去給の夏
 復二。归来より开折小。垣衣和女郎を伴ひ。故郷ハ伊勢と道と。伴侶と
 のいひ。然有ハ養家の石倉氏と。結髪むすぶの妻と。當時推盈夫妻の義
 死し。忌服と重後受。その謹慎と。吾伴も。さうといふ道ぬらるべし。と想
 ひ小され。更小又。故意素生と向も乳と。一稔の後復二。服の関せきが媒まへとして。
 婚姻の儀と結せんと。暗小その期と等うらら。思繫おもひき。復一も詳く得知。你の
 素生。陸奥白川の人と。數百里の山海と阻らる。這り漢小拐さ。埒
 ありといふ。抑怎るる縁故と。報ても苦うららぬ。所て疑念を晴させ。原
 是。你ハ什麼る人。と。向て垣衣畏り。且ハ羞うらら面と拵て。いふんとす。は先
 ぎらて。満来る泣水を混して。聲と吞り吞るや。去給の夏より。憑方も。死身
 と。人かすくも思されて。おん身邊近う使せらる。且文学より。武藝まで。誨らる

御鴻恩の山海より高く深う。されば仰の侍もども。妾が素生と委曲所
 え上へきゆり。些少憚りもあらず。假令亦听え上りとも。適末猛可ふ為
 便もさるる。一日二日と怠惰らち。小稟上へき序決もあらず。今日まで听え
 ちるね。御心を阻らるる。思さまん。最も恐くことひへ。津長くとも一遍
 妾の薄命の顛末と。聞食て賜へ。妾の原是。新田の庶流。脇屋右少将義
 隆朝臣の家臣。小館大六郎英直。といひ。う者。の女児。て。名どが。信夫と。うりし
 侍り。往應永六年の秋。少将陸奥と。落る。時。父英直。主君の附託。遁る。
 小路。て。尚陸奥。小苗。と。関と。渡瀬。の間。う。揖鎖。といひ。處。小身を。躲し。
 姓名。と。変形。白と。竄。時。の。至。を。等。ひ。ひ。小。妾。が。年。紀。七。才。う。り。秋。开。處
 の。産。土。神。比。祭。の前。夜。小。独。外。小。出。侍。り。と。开。る。男。が。抱。拳。て。物。見。させ。んと
 肩。小。掛。く。その。儘。遠。く。走。り。う。と。介。後。の。箇。様。々。任。心。々。小。ひ。ひ。き。と。て。越。後

大河内訓て
 才か分と云
 才ホカフ子也
 ありんか
 姉前編の
 まゆて金更
 小改らうり
 上小云々

へ去て賣人とせり。路。不毛山の麓。を。箱城守。延。小。救。ま。り。り。それ。う。伊勢
 へ。召。ま。て。竟。小。守。延。が。親。女。と。う。り。り。又。介。後。小。守。延。の。主。君。と。諫。めて。退。け
 ら。五。柳。村。小。住。ひ。り。木。造。泰。勝。俺。身。小。意。慕。豪。集。う。り。と。大河内。小。在
 以。頭。雅。主。と。訴。へ。んと。守。延。行。う。と。泰。勝。が。遠。矢。小。射。せ。り。俺。身。の。泰。勝
 が。三。十。日。の。別。荘。小。囚。ひ。て。泰。勝。小。従。ひ。う。り。泰。勝。怒。て。逼。り。故。小。樓。より。落
 て。自。殺。せ。り。達。小。六。助。則。が。一。且。義。侠。の。執。腸。う。り。道。路。小。國。司。小。直。訴。と。那。里
 小。来。り。泰。勝。と。捕。へ。仙。舟。と。以。て。蘆。生。せ。り。且。开。小。六。の。陸。奥。と。七。才。の。時
 小。離。另。う。り。義。兄。と。し。り。ま。と。脱。漏。も。う。説。出。て。聲。と。悄。り。と。う。り。
 この。い。と。匿。ひ。び。き。り。小。侍。と。と。姫。入。の。南。朝。の。忠。臣。と。お。し。り。強。て。藏。え。り。う
 も。侍。ら。と。那。達。小。六。と。う。り。原。末。脇。屋。右。少。将。の。父。英。直。小。遺。囑。せ。り。息。子。小。直。と
 して。侍。ら。と。耳。語。告。て。其。後。小。少。将。の。底。倉。の。温。泉。と。藤。白。安。同。が。與。小。擊。と。う。り

ひびきか そのうちまのく せで うまがの ちんごや ちんごや ときちやちや わくわく
 る。英直へ當下陸奥と出て。假名川の客店にて死す。時母屋小遺託
 て小六と藤澤の豪俠野上著演許差し。白紙の帖ある。そと著演引
 奪て身小替て養育せし。且著演が為人福良長者と喚とす。又小六
 が入水を示し。出て底倉へ赴き。少將の仇讐する藤白隼人が。一類残黨う
 結果あり。客店の目四郎が義侠其子揖取庶吉が来歴まで要と摘て脱
 かく話す。尔後小六が教誨小因て去稔の四月上旬。伊勢國と立去て。相模の
 藤沢へ赴んとて。阿真將曹が鎌倉へ年始の佳禮の使者ふゆく。便船と養
 母老樹庶吉們と諸共小志摩國鳥羽港より出帆せし。一五二十と細々と話説
 しく。姑摩姫の听く。津毎ふ感慨大さる。と。話切る處不至。或は怒り
 或は悲し。或は悼と。嗟嘆の聲と絶さる。安次も頻ふ嗟嘆。捉へ賊が索
 端と旁の樞樹小繫扯。姑摩姫小揖と。椽側小前より上り。垣衣小向ひく道

やう。原来你の稲城主の産子といふ。と。脇屋殿の老臣。館氏の女子。う
 る。欣。這は今始めて承りぬ。那館氏の新田一族大館主の庶流。脇屋殿の
 御丹小する人あり。豫て伊勢を听する。現江湖上の栄枯盛衰。想ふも
 肖の薄命こそ回ど。も勅と。と。這後の話説。在下代と。票上て。在下の既
 小票。如く。養母が婿子の弟小。家と嗣せんとす。色と看て。身と退んと。惟ふの
 う。另小輕卒小。口出さ。て。未一稔も立ぬ。間小寸功。ふも。あら。が。這儘。ち。と
 退んも。素餐の罪。ける。き。小。非。と。案。煩。ひ。う。比。隊長。る。阿。真。將。曹。の。國。司。
 満。春。卿。の。命。と。鎌。倉。の。管。領。家。持。へ。年。始。の。嘉。儀。を。演。り。う。使。者。と。被。ま。う。る。長。
 在。下。も。夥。兵。る。と。と。晋。物。の。韓。檀。の。宰。領。小。隸。ら。ま。て。同。僚。の。者。五。六。名。と。那。韓。
 檀。と。護。ら。う。鳥。羽。の。港。より。船。小。乘。れ。此。餘。英。真。氏。の。家。礼。も。六。七。名。あり。然。る。小。これ
 る。垣。衣。女。の。母。の。老。樹。と。揖。取。庶。吉。と。喚。做。る。那。達。氏。の。扈。從。と。共。小。這。船。小。便

船せられぬ勿論男女開別の事。這人々の艦の方。一間と苑と在る。正可
 小面の髪せよ。那の稲城の母女と疾くも這首小識ひき。抑這稲城右膳の
 一隊の長より。在下が親父石倉蜂六。大和の宇陀より弓輕卒。召出され
 て。伊勢の多氣へ移住し當下より。稲城大人の懸兵小隸属らしむれば。蜂六
 平素小那家へ立入る。内外の簿まで裏心る。せむ。就て在下が六才あり
 る。時を携て去る。守延夫婦甚く憐れ。這垣衣の信夫女。在下と同総
 る。不遊戯敵手小せむ。色葉字の始より。書とも誨へ籍とも讀し。晝夜
 習らせられ。形の像。小蚯蚓書とも記臆てひひ。さて介後。在下が生長と
 る。隨ひて弓馬槍刀の藝と教へ。或ハ六韜三略の一端とも講諭されて。只子の
 一般最愛まされ。佳きとも垣衣と十歳許の响より。男女の別と正ま
 て。相見らる。と許され。疎々々ひひ。思係る。稲城大人の忠言耳。逆

此向安次が
 往事と序次
 處る。其
 説出難き
 如く。其
 也。其
 省官情態
 大なる。其
 事勿き
 云

ひつ。國司の勘氣と蒙りて。五柳村へ退隱し。多氣小在とる。れ。蜂六も亦
 他の隊長小属らして。自然小疎遠。成れ。佳きとも在下の父母小等し。大恩
 あり。官長。且師。之。鹿畧と存せ。況て多氣より退くも。あ。縁。間暇
 折。必五柳の僑居と訪て。薪水の要事と便。傍。又。所漏。文武の教
 諭と乞。守延。酷く志とや感。せ。れ。或。日。在下と。雨室。小。招。き。想。ふ。小。和。主。人。品
 骨法。輕卒の兒。小。似。る。べ。く。も。非。ど。又。其。才。の。睿。敏。る。今。世。の。多。く。得。難。し。是
 以。多。氣。小。在。一。日。より。文。学。武。藝。と。学。せ。し。小。程。も。さ。く。上。達。し。と。殆。俺。們。及
 び。ご。う。然。と。い。ふ。最。愛。と。往。々。世。評。と。探。し。所。し。小。蜂。六。の。実。子。小。あ。と。と。
 楠家の浪人。隅屋某。甲。乙。落胤。ら。う。と。い。ふ。者。あり。原。來。俺。們。が。眼。力。の。大。く。違
 へ。る。も。う。楠。木。と。隅。屋。と。い。ふ。の。素。より。一。族。の。長。臣。と。い。ふ。既。く。所。し。る。
 有。き。然。ら。ば。家。系。も。卑。し。と。思。ふ。着。て。一。議。あり。和。主。も。豫。て。知。如。く。

仁左衛門守延の柳橋居
五柳橋居
守延擇佳婿
くろくめいむらさきむらさき



俺小一箇の女子あまど未さるべき婿もなし。已小嫁をべき期されば。這首よ
 りも。那首よろも。媳小兒婿小成んと。いふ者るは小非と。今世の薄情る。文武
 忠孝兼備して二心なれ丈夫。一個が未着るるは。和主の今こそ輕平な
 也。這戰國の世生とて類少るる老実人るま。竟る名と奉家と與一
 君父小忠孝と盡さる。鏡小照して看るが像。然とて女兒信夫と。和主妻
 小娶せんと。荆妻老樹も商量せし。他も和主が幾年の志と感ぜらば。異議も
 賢が諾ひさう。約莫誓姻へ人間一生の大事るれば。只赤心の賢愚と撰びて。強
 て良賤と論ぶるも。況や俺へ退隱して。菟荒小侶も庶人とするも。和主が職
 役とのまでも。怎で承引のめあら。蜂六小示譚して。近き小這議と料理
 んと。道とて。在下へ思ひも依り師の存念小呆るる。半响むら。徐小
 て。稟もす。物數るる。小可と。六才の歳。らん眼と掛ら。文學武藝。大

小とる。示教と賜へ。聊手足の勞と以て。志と看え。あつた。と
 今愛と賜りて。婿とせんと。ま。仰ら。骨小刻と。辱く。九の世と更る。と
 忘遺をるべく。非と。有難くと。ひる。然。あ。と。這議むら。一向小
 免と蒙るべ。开故。知せ。像く。小可。二才の响と。や。人。実父。託孤。命
 を受て。忠義の與。小可と。襦袢の中。う。看放ちて。所縁小着て。蜂六許。羞
 しく。小可も。頃日。小可。知。恁。と。蜂六。此。これ。と。現。多。年。小可
 と。慈愛と。親。い。恩義。深く。実の。父母。も。勝。と。と。怎。で。孝。養。と。尽。さん。と。
 想ふ。處。小。去。匡。き。内。事。の。碍。あ。る。故。と。小。可。と。疎。ん。と。然。と。小。可。が。身。の。浮。沉。の。
 明日の。俸。も。料。と。匡。後。計。普。通。の。縁。譚。う。と。固。辞。と。き。時。候。と。況。や。大
 恩。一。方。る。れ。各。家。の。息。女。と。賜。と。と。遠。患。難。の中。や。と。勞。苦。と。係。ん。勿。體。の
 き。小。極。め。て。共。小。住。難。き。一。條。も。あ。り。且。世。間。の。人。口。小。繫。と。各。家。の。瓊。瑾。小。事。

あつた恩と讐言の報ゆる小同じ。まきば這義いおん旨小違ひく。假令即勘當と被る
とも。決して領掌致し難し許しあつた。推辞しつゝ。稻城大人の頭と左右小
打掉てその又和主遠慮は過う。幾令内事小障碍ありて。怎う辛苦及ぶ
とも。夫とらう妻とらふ。开と厭ふべき。信夫も往々教訓しつゝ。難
難む克堪つし。且又縁と結ぶとも。必稻城の名跡と継て異姓と名出るといふで
いろ。この又男小仔細もあつた。枉て這意小後ふべと再三再四説きつゝ。在下
強面肯は強て過辞して回りし。分解がれ。継母の意味と猜して身と退んと
想ひし事のあれ。と知じつて稻城大人の尚とあつた。小説を聞小料ら及も。衆
勝が。非道の毒手小身と亡つた。當下在下悲憤不堪。送の澤甲乙と
力を勤せと嘗つ。孰と案ずる。稻城大人の横災の全く盜賊の所為小ありを
往日豪奪せしと。信夫どの。在處と知て訟んと。大河内へ出立と。折ら

られ。仇讐言と外小覓う小及ぶ。併契据りて。惣小手と下し難し。什麼
おもして契驗と得。在下國司小訴へて。信夫どのと拿復。助太刀と仇讐の夏
と願。除非中流小舟横り。徒々所も容らる。師恩の與小單身小
りとも。泰勝と狙撃て運拙く。斬死せんと想ひつ。ありと仕の途の俺も
あつて。鈍や月日と過。向小立刺達生の義侠。泰勝へ捉へられ。信夫どの
還され。仇讐の一條小免され。所て本意と想ひ。折と得て身退く
時至ら。他郷へ出て。泰勝と搜出し。先討捕て師の之恩と報。と這首小
想ひの立。身と心小任せ兼て。稻城一家の達生。指揮小因て。東の方へ旅
立。由も。英虞氏の。話説小既く。所。在下も。旅装小暇。五柳の宿
所小去。二臂の力を盡。本意と查。焦情由
て。那船中。小他見と憚。通着倚て。落着の地名も。折

あつんと不知頁も。舳先の方ふひぬ作者云這話説未盡終ども楮數の定限
已小充是バ。卷と更て第四卷四十七回の發端小分解るを所終



開卷驚奇俠客傳第五集卷之三終

あつんと不知頁も

舳先の方ふひぬ

作者云這話説未盡終ども楮數の定限

已小充是バ。卷と更て第四卷四十七回の發端小分解るを所終

